慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パネルディスカッション : コンテクストネットワーキングが実現するミュージアム世界
Sub Title	
Author	松田, 隆美(Matsuda, Takami) 金子, 晋丈(Kaneko, Kunitake) 渡部, 葉子(Watanabe, Yōko) 齋藤, 歩(Saitō, Ayumu) 本間, 友(Honma, Yū) 石川, 尋代(Ishikawa, Hiroyo)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・ コンテンツ統合研究センター
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.5, No.1 (2018. 3) ,p.43- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第7回 デジタル知の文化的普及と深化に向けて : コンテクストネットワーキングの分散型ミュージアムへの展開 開催日時 : 2017年11月24日 (金) 14:00 ~ 17:30 開催場所 : 慶應義塾大学日吉キャンパス西別館1
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000005-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パネルディスカッション
コンテクストネットワーキングが実現するミュージアム世界

（左より）

<モデレーター>

松田 隆美（DMC 研究センター研究員・文学部教授）

<登壇者>

金子 晋丈（DMC 研究センター研究員・理工学部専任講師）

渡部 葉子（アート･センター教授）

齋藤 歩（京都大学総合博物館（研究資源アーカイブ系）特定助教/アーキビスト）

本間 友（アート･センター所員・文学部非常勤講師）

石川 尋代（DMC 研究センター特任講師）

松田　まず始めに、渡部先生と金子先生から、齋藤先生、本間先生、石川先生のお話を聞かれた上でのコメントを一言ずつ頂戴できればと思います。

渡部　ありがとうございました。ほかの方々に比べて、私はやはり旧弊な領域で話したなと思っております。齋藤先生にお話しいただいて、私はかなり美術史的な観点から話したのですが、アーカイブズの方から見て、同じゴッホの作品を違ったフェーズから切っていくことを、特に前半部分にコメントをいただいた、4 つのフェーズで切れるのではないかというお話しは、とても面白かったです。

それは、もしかするとこれから美術館などがデータを作品にまつわってつくっていく際にも、少し違った観点から見て、もう少し広いところにデータを敷延したり利用したりできる可能性があるのではないかと思いました。それから、ビュレンについては、実はこのアクセス・ポイントで挙がっているさまざまな項目が、ビュレンの作品のように、かなりそのカテゴリーがずれてくると思われるような作品に関するアクセス・ポイントとして、面白い意味を持つと思いました。例えばこの場所や地名のようなことが重要であるという。

すると、本来は美術作品というのは、場所や地名などはあまり帰属しないものなのですが、あの作品ならパリといった、地名や場所というものが非常に重要なポイントになってくる。それから、戦後美術のものでは、人名が分かればだいたいのアクセス・ポイントの 8 割方のことは、問題が解決するというように見ると、カテゴライゼーションがしにくいアート作品というのは、こういうアーカイブズ学で成り立っているある種の手法というものを使うと、何かすっきり情報共有ができるのではないか。今日のテーマと関係あるかどうか分からないのですが。そういうところが大変有意義なコメントとして受け取りました。

金子　今日、皆様の話を聞いて、とても楽しく、わくわくしました。コンテクストネットワーキングという言葉を出した瞬間に、こんなに話がつながってくるのかということが、まず一番の感想です。そのコンテクストの使い方はそれぞれ違うのですが、うまくつなげてコンテンツを使っていこうといったところは共有できていると、思いました。

先ほど齋藤さんの話の中で、ユニファイドなシステムの話がありましたが、もしかするとうまく伝わっていないのかなと思いました。私の誤解であれば申し訳ないのですが。私の話の中では、ユニファイドなシステムは、私たちがカタログシステムで実現しようとしているものと対峙する概念として提示しています。ですから、中央集中型で、極端な話をすると、先ほどのアクセス・ポイントについてディクショナリーを元にしてきちんと定義し、それを絶対使いなさいといったことをやるのがユニファイドシステムで、我々は、そういうユニファイドシステムではなく、仮に苗字と名前の間にカンマが入っていようがいまいが、つなぎたい人がつないでしまえば、それは一緒ということにしようとしています。そういうルーズなコントロールの中でコモン・ユーティリティーを目指すことがインターネットのコンセプトであり、ネットワークを拡大していくときに考えなくてはいけないポイントなので、それをコンテンツネットワークに適用しましょうということです。もしうまく伝わっていなかったとしたら、訂正しておきたいと思いコメントしておきます。

松田　ありがとうございます。確かに金子さんがおっしゃったとおり、コンテクストという言葉が出てくると、皆それぞれに多少漠然としつつもイメージを持っているので、それをいかに発信するかという点をめぐって議論が活性化するようです。まさにこれが有機的なコンテクストネットワーキングの実例のように感じてしまいます。これまでに、長さはそれぞれですが、それぞれの立場からお話をいただきまいたので、まずパネリストの５名の皆さんの間で相互に確認しておきたいことや質問事項、さらに是非コメントしておきたい点がございましたら、ぜひお願いいたします。

本間　金子さんのご発表を聞くたび、カタログシステムを理解したと思い、しかし１カ月後にやはり理解していないと思う、というシーソーゲームを常に経験しています。今日は、カタログシステムがまったく新しい検索、発見のためのシステムで、「Google」や「Facebook」のような、ブローカーによるユニファイドシステムが存在しないと情報が発見されない状況を打破するというところを目指しているのは分かったのですが、カタログ自体をどうやって

見つけるのかというところが、よく分かりませんでした。今日のご発表の範囲では、オブジェクトを見て、そこにひも付いているカタログを参照することができますが、オブジェクト以外からのカタログへのアクセスというのは、どのようなイメージを持てばよいのでしょうか。

金子　それは疑問ですよね。今の話をアクセス・ポイントという言葉を使うと、今のシステムは、アクセス・ポイントはファイル ID かカタログ ID ということになります。したがって、あるファイル ID が提示されると、そのファイルに辿り着いて、それに紐付いているカタログ ID を入手することができます。もしくは、カタログ ID を始点にし、カタログ ID からスタートすると、そのカタログに含まれているコンテンツ、ファイル ID が入手でき、そこからまた、そこに紐付いている別のカタログを入手できます。

ですので、アクセス・ポイントとしては、基本的にはオブジェクトなりコンテクストであるカタログが、正確に言うと、デジタルファイルとカタログを合わせてデジタルオブジェクトと、私は呼ぶことが多いのですが、デジタルのオブジェクトが一意に指定できれば、そこをアクセス・ポイントとして探索を開始するシステムに、現時点ではなっています。

これはシステムのつくり方にもよると思いますが、例えば人の名前からいきたければ、人の名前を一種のポータルサイトをつくって、そこの人名を入れると、それにひも付いたファイル ID なりカタログ ID が返ってくるシステムを別途つくれば、そういう人や地名をキーにしたカタログにおけるアクセス・ポイントの 1 個前の段階のアクセス・ポイントが設定できるように考えています。

本間　今回のお話しですと、検索インデックスを用意するようなブローカー、ユニファイドシステムの存在を前提にしなくても良いところが、カタログシステムのすばらしいところのようなので、人名を入れてカタログにアクセスするというふうになってしまうと、強みがぼけてきてしまうような気がします。そこをどのように捉えるかというのは、今後の課題ですか？

金子　どこまでの範囲のサービスを考えてシステムをつくるかということを、エンジニアは考えます。ですから、要求要件はどこまでか、これをまずクリアにしないといけないと思います。ですが、システムを作り終えると、その段階で『え？　こんなことできないの？』というように、人文の方々はよく仰います。そうしますと、こちらは『こういう既存のシステムとの組み合わせなら、こういうことができますよ』という、お答えをするしかありません。ベースとなる、本質的なファンダメンタルなカ

タログのシステムは、そういう検索エンジン的なインデックスを持たなくて動くところがファンダメンタルな部分で、そこに既存の検索。検索が絶対いらないとか、私は言っておりません。便利なところはあるので、その便利なところに検索を持っていき、全体のシステムを再設計しましょうと、提案しています。

本間　分かりました。取って代わるものではなくて、オルタナティブを準備するというイメージでいればいいんですね。

金子　そうですね。

石川　このお話しに関連すると思う質問をさせていただきます。実際にシステムを構築しているときに、少し問題が出ることがあります。先ほどの金子先生の発表で、「モナリザ」に何億もアクセスが行くと言っていましたが、「モナリザ」の本物は1つしかないですよね。けれども、デジタルデータは、五万とあるわけです。それらをどのように取り扱うべきかという問題があると思います。

ローカルな話でも、システムをつくっているとき、共有するファイルと設定していても、それらをみんなコピーして共有していたら、それはすべて別のものとして取り扱われますよね。そのような状態におけるデータの取り扱いというのは、どうしていくべきなのか。

金子　著作権法的な問題もありますので、基本的にはデジタルデータはコピーせずに使ってください。デジタルデータも、もちろん実際にファイル転送されるというのは、実際コピー処理がコンピューター的には行われているので、それはもういたしかたないものだと思いますし、それができるのがデジタルのいいところなので、それは受け入れた状態で、手元にコピーを置いておくということはせずに、ぜひネットワークを使って、常にダウンロードして表示して、使わないときは自分のところには置かないというのを徹底していただくのがいいと思います。

石川　その考え方には賛成なのですが、実際はそうでもないということを人文系の先生からお聞きして、実際にシステムをつくっている者としては愕然といたしました。この件は、もう少し気になるところがありますので、おいおい議論していきたいなと思っております。

松田　ありがとうございます。この他にいかがでしょうか。

渡部　齋藤さんにお聞きしたいことがあり

ます。さきほどご紹介してくださったISAD(G)の基準のなかで、コンテクストのエリアというものが3の2で、コンテンツとストラクチャーのエリアというものが3の3にあります。ここでコンテクストの方がコンテンツより上位というか、先に来ているということは、それは何か意味があったり、広いところから狭いところにといったりしたような、階層性あるいは順位という概念が存在するのでしょうか

齋藤　項目の並びは重要度順ではありません。並び順に特別の意味もないと考えています。しいて言えば、コンテクストをコンテンツから切り離して別の項目（エリア）にしたことがポイントです。

ただ、アーキビストが、記録の内容（コンテンツ）と同じくらいに、その記録を「誰が」「いつ」「なんのために」作成したかといった記録の背景（コンテクスト）に注目することはアーカイブズ学の原理からも確かなので、いまのご指摘から積極的に誤読を進めて、コンテンツのエリアが先に挙げられていることに意味を見出してしまってもいいのかもしれません。

金子　「3.2.1 Name of creator(s)」がコンテクストの一番上にありましたが、これはコンテクストを記述した人を指しますか？

齋藤　「3.2.1 Name of creator(s)」は、記録や文書の作成者です。

金子　それがコンテクストに入るのですか。

齋藤　そうです。記録そのもの（コンテンツ）の情報に対して、その記録が生み出される背景がコンテクストの情報です。つまり、作成者や作成年についてです。おそらくコンテクストの定義が分野によって違うので違和感があるのだと思います。ちなみに、記述者については「3.7.1 Archivist's Note」に書くことになっています。

金子　なるほど。よくわかりました。ありがとうございます。

齋藤　私のほうからもお二人のコメントに応答します。

ビュレンについてもゴッホと同様に、最初はDACSの六つのアクセス・ポイントに当てはめてコメントできそうだなと思いました。しかし、お話を伺っていくにつれて、ビュレンの作品は従来のカテゴリーや慣習から逸脱するところこそが重要で、カテゴライズすることに対する作家の抵抗と批判の精神が感じられましたので、安易なカテゴライズを避けようとして少し慎重にコメントしました。ゆえにレビューの最後のほうはあいまいな表現が続いてしまいました。結果としてカテゴライズは回避できたものの、うまくまとめられなかったというのが正直なところです。

もうひとつ、ユニファイドなシステムに関しては完全に誤解しており、逆の理解をしていました。ユニファイドなシステムを中央集権的な仕組みとご説明いただいて、そこに迎合することへの危機感とそこに潜在するある種の脆弱さとが示唆され、そのオルタナティブを提案されていたことは理解できたように思えます。

そのうえで、私の関心に引き寄せて少し違う角度から議論を展開させてください。

京都大学研究資源アーカイブでは、新しいコレクションを公開した際に、そのことを周知する術をさほど用意してきませんでした。学内のメーリングリストは活用します。広報用に印刷物もつくり配布します。それでもなお、広大なウェブの世界に新しい資料群をひっそりとリリースしているに過ぎないという感覚は拭えません。

そのようなときに、たとえ中央集権的な仕組みであっても、そこが入り口になって研究資源アーカイブの事業が知られたり大きいネットワークへとつながっていったりするのであれば、周知という点では極めて有効ではないかと考えているところです。先ほど金子先生がおっしゃった、ローカルなネットワークを統合してグローバルなネットワークへ、という構想の実現にあたっては、中央集権的な方法ともうまく折り合いをつけて上手に活用していけばいいというのが私の考えです。

同じような趣旨で金子先生に質問させていただくと、資料同士がコンテクストでネットワーキングされることは分かったのですが、利用者の第一歩がどこから始まるのかよく分かりませんでした。でも、そこはGoogle で検索するところからまず入り、そのあとはカタログシステムの豊かな世界に接続するということでいいのかなとも思いますけれど……。

つまり、私たちは「アーカイブズの入り口」の課題を抱えているということです。はじめの一歩を獲得する方法としては、印刷物をつくったりとか、Facebook で「いいね！」を促したりとか、それくらいしか思い付きません。情報をどう知ってもらうかということなのですが、それに対してなにかエンジニアリングの力による解決の見通しはあるのでしょうか。

金子　まさにそれを検討中です。我々はこのプロジェクトの初期の段階から、カタログシステムのスタートポイントはどこか、という問題を抱えています。石川さんは常にそれを、コンテンツ空間として、すべてのコンテンツはフラットなのにもかかわらず、なぜ最初のコンテンツが意図的に指定され始まるのかという、そのフラットさが欠けている部分に疑問を持っております。そこをどう考えるのかということを、延々と 5 年間、6 年間、僕は問い詰めを受けています。今年、ミュージアムを意識した展示をし始めましたので、2 つの事例をご紹介します。

1 つは、QR コードを置き、その QR コードをスキャンすることによって、そのコンテンツを中心としたカタログの世界が画面に出てくることが、1 つのソリューションです。あくまで物をエントリーポイントにして、そのコンテンツ空間を引き出してくるというものですね。その QR コードに何が入っているのかというと、さきほどの物のファイル ID が入っており、そこをア

クセス・ポイントにして引き出してくることになります。

もう1つは「キャンパスミュージアム」でエントリーポイントをどうするかという課題です。ユーザーの位置情報が今は簡単に GPS で取得できますが、位置に合わせて、一番近いコンテンツを提示してほしいというリクエストをいただきました。一つ一つのコンテンツに緯度経度の情報が全部記載されていることが前提であったとしても、それを提示するのは難しいと考えています。

この大きな違いは何かというと、アクセス・ポイントが明確に提示されているかいないかになります。緯度経度の情報を、自分の位置情報が分かったから提示しているではないかとおっしゃるかもしれませんが、コンテンツ空間がとても広大に広がっている中で、それに近い緯度経度を持つものを、一個一個のコンテンツで探していかないといけないところに一番の問題があります。これが難しい理由です。

先ほどのモザイクで、QR コードでやっている例と今の例が本当に対比的に見えると思うのですが、どこから入っていくかは非常に重要な問題で、今我々の解決策は、物に頼っています。逆に、誰かから広告媒体を通して、もしくは紙媒体なり放送媒体を通して、そのポインターとなるファイル ID なりカタログ ID をもらえば、もちろん誘導はできるのですが、それを越える手だてを今は考えられていないということが、正直なところです。

齋藤　物をエントリーポイントにする方法は、はたして有効なのでしょうか。というのも、物から入ったその先は電子の世界で、その先もやはり電子から電子に情報がつながっています。そうすると、エントリーポイントはウェブとの接点に設けるのが有益ではないかと思うからです。

大学では書誌情報の検索システムが非常によく使われますよね。それに比べれば、アーカイブズの検索システムはほとんど使われないに等しい。ですから、アーカイブズへの入り口を書誌情報検索システムに仕込めないかと考えています。MLA をまったく異なるものだと違いを強調する人も多いのですが、アーカイブズ学は図書館学に学びながらライブラリアンと一緒に築き上げてきたところも少なからずあるので、図書館という頼れる先輩に助けてもらうようなイメージです。

例えば京都大学の蔵書検索では、建築家の「ジョサイア・コンドル」で検索すると、図書とともに貴重書としての建築図面も結果に表示されます。こうしたかたちが入り口としてはスマートで、人も入りやすいと思うのですが、いかがでしょうか？

金子　例えばジョサイア・コンドルから入って、という事例は、何か調べたい対象があるように思うのです。今我々が携わっているシステムやキャンパスミュージアムも、何か目的となるコンテンツがあるという設定ではありません。むしろ自分が日常的に触れている世界を、もっと深く探究してみませんかという考え方です。広く浅くというよりも、1カ所から自分の触れているところを深くといった方向で、今は考えているので、何かを見つけたいという要求に対しての直接的な解ではないように思っ

ています。例えば、日吉の駅前で降ろされて、日吉の裏道を歩いて、日吉ってこんなお店があるんだ、といったようなことを学ぶことに近い。目的なくエクスプローラーするということが、ゴールなのかなと思っています。

齋藤　さきほどは否定的な物言いでしたが、入り口の種類は多様なほうがいいので、物から入る可能性も探究したいところです。

いまの人たちはスマホでさまざまな物を撮りますよね。例えば、写真を撮ることから入って、あとは偶然の出会いに身を任せて散歩するような、日常からの発想は大事にしたいです。私の大学でのミッションは、第一に研究のための情報提供ですが、それだけでは利用の幅が狭いので一般の方々にも周知しようと考えた場合、日常生活のなかにこそ情報発信のヒントが隠されていそうです。そう考えるとやはり物は入り口としてあり得るのかもしれません。

金子　昔の図書館は、必ず検索目録があったと思います。子供のときなので正しい高さは覚えていないのですが、棚に四角いカードがずらりと入っていて、ぱらぱらとめくることが、子供心には楽しかったことを覚えています。あそこでどれだけの人がその当時検索していたのかというと、ほとんどしている人はいなかったということが、私の記憶です。

どちらかというと、図書館に来ると本がずらりと並べてあり、これを借りようという人はおおよそ分類が決まっていますから、そのコーナーへ行き、実際に探して手に取るということが、新しい情報の発見方法であったかなと思います。

ところが、現代はデジタルになり、要するにぱらぱらとカードを見ることが高速でできるようになったので、みんなそこに群がっているだけのように、思えます。けれども、本質的には、今も本屋がつぶれていないのと同じように、本屋における本のさまざまな並び方に価値があり、それをいろいろ見て、こんな情報もあるんだと取り出せる喜びが、何かデジタルでつくれるのではないかと思っています。本屋さんだと、何軒でもはしごするのに時間がかかりますが、デジタルならばすぐに結果が出てくるので、そういう使い方にもっと着手してみてもいいのではないかという提案ですね。

本間　これは、ただ私が感じているだけにすぎないのですが、「OPAC」にせよ「Google」にせよ、デジタルで自分の関心を入力しようとすると、マスに寄ってしまう感じがする。というのは、「みんながどういうことを考えていて、世間の人はこういう方向なんですよ」ということが、見え過ぎてしまうところがあると思います。トレンドのワードはこれですというように。今は、予測の入力も出てしまうのでなおさ

らです。ですから、やはりデジタルになると、マジョリティー、声が大きいもの、よく検索されるものは、とてもよく検索されるけれど、検索されないものはずっと検索されないまま。情報の露出のヒエラルキーが固定化される気がしています。

一方で、どこを見に行くかという気分や、日常で出会うものは、もちろんトレンドはもちろんあるのですが、デジタルの世界よりも、もっと個人的なもののような気がするのです。別に何の確証も証拠もないのですが。そういった意味で、大きく右左に寄り過ぎるという、現代のある種の傾向を考えると、物からの入力というのは面白いのではないかと思っています。しかし一方で実務的には、「OPAC」につなぐことは良いと思っています。

松田　話が非常に面白くなってきましたので、フロアの方からも、コメントなどございましたらお願いいたします。

質問者 A　今日のテーマはコンテクストのネットワークでしたが、コンテクストはそれぞれの領域、あるいはそれぞれの場面でいろいろ変わり得るものだと思います。ただ一方で、記録して、公開して、共有するという、そういう側面で考えたときには、それが見て分かるように、他者から受け止められるように、あるいは解析できるように、リソースとその関係という形に分解して表現することになると思います。

もしそうだとすると、それはやはりリソースのグラフになりますので、もともとのコンテンツのネットワークとどこが異なってくるのだろうかと思います。コンテクストのネットワークとおっしゃるときには、コンテンツのネットワークとは異なって、何かプラスの要素があったり、あるいはその扱いが異なっていたり、もしくは管理方法が異なるなど違いがあると思います。何をもってコンテンツのネットワークというかということについては、それぞれの領域により異なるので難しいとは思いますが。なかなか接点というか、意見をうまく結び付けることは難しいかもしれませんけれども、コンテンツのネットワークではなく、コンテクストのネットワークだとおっしゃるには、それぞれ何が加わったときにはコンテクストのネットワークと呼ぶのかという点について、私は関心があります。

金子　先ほど申し上げましたように、コンテクストはネットワーキングするものであって、ネットワークではないと思っています。コンテンツのネットワーク上でコンテクストを選択しながら、そのネットワークを楽しむために、コンテクストのネットワーキングと言っています。ご質問の意図は、コンテクストとコンテンツの関係が不明瞭だということなのでしょうか。先ほど、ご質問を伺っていたときには、ふむふむと思っていましたが、いざ答え始めてか

ら、何を答えてよいものか分からなくなってしまいました。

質問者 A　コンテクストのネットワークだとおっしゃるからには、コンテンツのネットワークとの区別はどこにあるのでしょうか。コンテクストもおそらくコンテンツ、リソースを組み合わせ、ネットワークされているものではないでしょうか。それらをなぜ区別する必要があるのでしょうか。

金子　今、コンテンツがハブになり、コンテクストがエッジ、線になって、ネットワークがつくられている、そのようなシステムをつくっています。これを逆にして、コンテクストをノードにして、エッジをコンテンツにするというシステムもつくれなくはないと思います。

質問者 A　そのときのコンテクストとおっしゃるのはエッジだということで、これは RDF でいうプロパティのようなものなのでしょうか。

金子　それを逆転させることは可能な気はしますね。けれども、それが使い勝手がいいかどうかが肝だと思っています。どちらかと言えば、皆さんがコンテンツを見るという動作をメインにするというのであれば、コンテンツからコンテクストの一覧を取得できるタイプのネットワークの方がよいのではないかと思い、コンテンツをノードにし、コンテクストをエッジにしたのですが、答えになっておりますでしょうか。

質問者 A　ありがとうございます。今の設定でいいますとグラフのエッジの部分だけをコンテクストとおっしゃっているということですね。

金子　私はそう捉えています。

質問者 A　おそらく他の方々はもう少し広い意味でコンテクストと仰っているように思いますが、コンテクストはコンテンツとコンテンツの間を表現できる、リレーションを図るようなものだと、エッジだとそのように限定してしまってよいものでしょうか。

金子　その点につきましては、私も皆さまにご意見に伺ってみたいです。

齋藤　何がコンテンツで何がコンテクストかを一元化しようとする議論は、あまり生産的ではないと思います。先ほど金子先生から、ISAD(G)の「3.2.1 Name of creator(s)」がコンテクストであることをあらためてご確認いただいたように、同じ言葉でも分野の違いによって意味が異なるからです。

私の発表で補足的に話しましたが、DACS の①から⑥にはコンテクスト寄りの要素とコンテンツ寄りの要素が――あえて明確化せず、解釈の余地を残しているだけなのかもしれませんが――混ざっている気がして、コンテンツ／コンテクストで明確に分類できません。重要なのは、アーカイブズにおけるリレーション（関係性）の根拠を典型的な六つのタイプに整理したことにあって、それをどう呼ぶのかは研究分野

によるということです。

石川　私が今回、システムの方でコンテクストという言葉をあまり出さなかった理由として、コンテクストについては、その捉え方や表現の仕方によく分からないところがあるからです。それでも、コンテクストネットワークがコンテンツネットワークと異なる点は、カタログという概念が１つ入っているところだと思っています。カタログにおいてもコンテンツがつながっているので、コンテンツネットワークと呼べます。ですが、そこにカタログという１つのまとまり、そのまとまりの概念が入っていることで、コンテクストネットワーキングになるのだろうという認識で、システムをつくっております。

松田　ありがとうございました。この他にご質問はございますでしょうか。

質問者 B　非常に興味深い議論を聞かせていただいて、ありがとうございます。1点、確認をしたいことがあるのですが。

お話を伺っていて、ユニファイドとローカルと言ったらいいのですかね、その葛藤があるような気がしました。ユニファイドは従来ある技術なのだろうと。今回発表いただいた内容は、おそらく新しいアプローチの研究をされてきたということだと思うのですが。金子先生の発表の中で出てきて、ほかの方々で出てこなかった言葉というのは、ローカルなものの集合体という話で、そのローカルなものを特徴づける言葉としてコンテクストという言葉が使われていた。

そうすると、ローカルなものというのは、個別のキュレーターと言ったらいいですかね、こういう方々が何らかの、ここは渡部先生のお話のように、さまざまなものの見方、ミュージアム・イン・コンテクストなのか、コンテクスト・イン・ミュージアムなのかという見方があるということで、キュレーションが行われるのだろうと。

そういう意味合いで、金子先生のお話を伺って私なりに理解したのは、非常にたくさんのキュレーターの方々が、個別にローカルなコンテクストネットワークをつくり、そのローカルなコンテクストネットワークの集合体として、新たな知の空間と言うのか、そういうものがつくられる。そこはかなりの自由度がおそらくあり、そこがいわゆる従来のユニファイドと対峙するアプローチがある。これこそが非常に新しいのだというように、伺ったような気がしているのですが、この理解で合っていたのだろうかということを、確認させていただきたく、手を挙げさせていただきました。

金子　おっしゃるとおりです。先ほど齋藤さんのお話の中で、6 個に分類されますという話と、渡部先生が、人名で 8 割カバーできますといった話をされていました。ロ

ーカルなコンテクストと言っているものは、理論上無数に存在し得るのですが、一般的によく使うのは 6 個ぐらいというような話が、おそらくアーカイブズ学の方の考え方なのだろうと、私は理解しています。

では、その 6 個で何パーセントカバーできるのかということが、エンジニアリング的な考え方ですし、一方で、それ以外のところは無視していいのですかということと、先ほどの、これはフィットしませんねとおっしゃっていた、現代美術でそもそも何と記述していいかも分からないようなものを、どのように言語化して、その 6 個に当てはめるのかといったところを、どちらかというとすくい上げたいというのが、ローカルのシステムの売りというか、主張したいところです。それこそが多様性にもつながりますし、新しい理解の発見を促します。

逆に誰かが気付いているはずのものを、頑張って考えるという作業が、6 個だけですと生じるかもしれません。ですが、それを網羅的に最初から入手できるのであれば、その重複は避けられますし、また新しい発見につながるのではないかと、私は考えています。

松田　いろいろとコメント、ご質問などあるかと思いますが、時間となりましたので、この後は研究交流会の方で続けていただければと思います。研究交流会というのが、この DMC シンポジウムのコンテンツなのか、それとも、皆さんに楽しい雰囲気でシンポジウムを思い返していただくためのコンテクストなのか。そのあたりは難しいことかと思いますが、どちらにしても、ご交流いただけますと幸いです。本日のパネリストの皆さま、どうもありがとうございました。